

湧別町バイオマス産業都市構想



北海道湧別町

令和2年9月

目 次

1	地域の概要.....	1
1.1	対象地域の範囲.....	1
1.2	作成主体.....	2
1.3	社会的特色.....	2
1.3.1	歴史・沿革.....	2
1.3.2	人口.....	4
1.4	地理的特色.....	5
1.4.1	位置.....	5
1.4.2	地形.....	6
1.4.3	交通体系.....	6
1.4.4	気候.....	8
1.4.5	面積.....	10
1.5	経済的特色.....	11
1.5.1	産業別人口.....	11
1.5.2	事業所数.....	13
1.5.3	農業.....	14
1.5.4	水産業.....	19
1.5.5	林業.....	20
1.5.6	商業.....	21
1.5.7	工業(製造業).....	23
1.6	再生可能エネルギーの取組.....	24
1.6.1	バイオガス発電.....	24
1.6.2	太陽光発電.....	25
2	地域のバイオマス利用の現状と課題.....	26
2.1	バイオマスの種類別賦存量と利用量.....	26
2.1.1	廃棄物系バイオマス.....	26
2.1.2	木質系バイオマス.....	26
2.2	バイオマス活用状況及び課題.....	28
3	目指すべき将来像と目標.....	30
3.1	背景と趣旨.....	30
3.1.1	湧別町総合計画.....	30
3.1.2	北オホーツク地域循環共生圏構想.....	30
3.1.3	災害への備え.....	32
3.2	目指すべき将来像.....	33
3.3	達成すべき目標.....	35
3.3.1	計画期間.....	35
3.3.2	バイオマス利用目標.....	35
4	事業化プロジェクト.....	37
4.1	基本方針.....	37

4.2	計画区域	38
4.2.1	集中型 BGP	38
4.2.2	個別型 BGP	40
4.3	集中型 BGP プロジェクト	41
4.4	個別型 BGP プロジェクト	47
4.5	電力会社との系統連系について	57
4.5.1	自営線を用いた電力地産地消の検討	57
4.5.2	北海道における募集プロセス及びノンファーム型接続について	58
4.5.3	北海道電力との協議	59
4.6	その他のバイオマス活用プロジェクト	59
4.6.1	既存事業の推進	59
4.7	再生可能エネルギーの導入状況	60
5	地域波及効果	61
5.1	経済波及効果	61
5.2	新規雇用創出効果	62
5.3	その他の波及効果	63
5.4	BGP 事業の効果と SDGs	64
6	実施体制	65
6.1	構想の推進体制	65
6.2	検討状況	66
7	フォローアップの方法	67
7.1	取組工程	67
7.2	進捗管理の指標例	68
7.3	効果の検証	69
7.3.1	取組効果の客観的検証	69
7.3.2	中間評価と事後評価	70
8	他の地域計画との有機的連携	72

1 地域の概要

1.1 対象地域の範囲

本構想の対象地域の範囲は、北海道湧別町とします。

本町は北海道の東北部に位置し、オホーツク海と北海道で最大の湖・サロマ湖に囲まれたチューリップのまちです。

一級河川・湧別川の下流から河口に位置するため、肥沃な恵ある大地では畑作が、山間や河口域では乳牛飼育による酪農が盛んで、牧歌的な景色が広がります。春には街中にチューリップが彩り、みどり豊かな多くの自然が人々を楽しませてくれます。

気候はオホーツク海型気象地帯としての特色をもち、冬の寒さは厳しく、例年1月下旬頃から流氷が接岸しますが、比較のおだやかな気候で日照時間に恵まれているのが特徴です。



図 1-1 湧別町の位置(上)、町の花 チューリップ(左)、流氷(右)

出典：湧別町

1.2 作成主体

本構想の作成主体は、北海道湧別町とします。

1.3 社会的特色

1.3.1 歴史・沿革

本町は平成 21(2009)年 10 月、合併新法下において、隣接する上湧別町と湧別町が合併し誕生した町です。「湧別」とは、アイヌ語で「鮫(ユペ)の住む川(ペツ)」の意味で、昔、湧別川河口から近海にかけて相当数の鮫が生息していたことに由来しています。

(1) 先史時代

本町が属するオホーツク地方では 2,000 を越える遺跡が確認されており、オホーツク海沿岸地域では縄文、続縄文、オホーツク文化、アイヌ文化まで各時代の遺跡が分布しています。本町には、縄文文化の「湧別市川遺跡」、縄文文化期～擦文文化期の「シブノツナイ竪穴住居跡」等多くの遺跡が見られ、本町に人類が住みはじめたのは、およそ 1 万年前と推測されています。

また、黒曜石の原産地として知られる近隣の白滝村(現遠軽町)等内陸部では旧石器時代の遺跡が多く見られ、オホーツク沿岸の古代遺跡は樺太・シベリア等大陸諸文化との関係が強く認められます。

オホーツク地方は、旧石器時代から日本人の祖先が住みはじめた地域の一つで、太古の昔から、海の幸、山の幸に恵まれた豊かな土地です。

(2) 警備と開拓にあたった農民兵士の里

18 世紀中期以降、明治政府は北辺警備の充実のため、蝦夷地(北海道)に屯田兵制を施行して警備と開拓を行わせました。屯田兵は明治 8(1875)年の札幌郡琴似村に始まり、明治 30(1897)年、湧別屯田第 1 陣が移住、明治 32(1899)年までに、道内各地に 37 の兵村が置かれました。上湧別地区には当時の区画の北兵村地区と南兵村地区が残っています。

(3) 開基～分村～100 年の時を経て再び一つの町に

明治 2(1869)年の北海道開拓使設置後、本町の地域は、北見国 8 郡のうち紋別郡とされ、明治 5(1872)年「ユウベツ村」が誕生しました。明治 15(1882)年、網走郡役所に勤務していた半沢真吉が近代農業を行うため本町に移住し、湧別川河口付近に鋤を下ろしたことが本町の開基とされています。



写真 1-1 屯田七夕まつり
「屯田兵行進」

出典：湧別町

明治 30(1897)年に紋別戸長管下から分離し、湧別村戸長役場が旧湧別町に設置、その後明治 39(1906)年の 2 級町村制施行に伴って湧別村役場が設置されました。明治 43(1910)年には、戸数の増大に伴い、上湧別村(旧上湧別町)が湧別村(当時、下湧別村と改称、旧湧別町)から分村され、旧 2 町はそれぞれの歴史をたどります。平成 21(2009)年、分村から 100 年の時を経て再び両町は合併し、一つの町となりました。

(4) チューリップが町のシンボルに

北海道としては農地面積の少なかった上湧別地区において、昭和 32(1957)年、高収益作物であるチューリップの栽培が推進され、オランダから球根を輸入、栽培が開始されました。昭和 35(1960)年には生産量(33 万球)・輸出货量共に北海道内一となり、昭和 40(1965)年には 22 万球を輸出するようになりました。しかし、昭和 41(1966)年にオランダの球根が世界市場で値下げされたため日本からの輸出が困難を極め、国内消費拡大に努めるも、当時は花を楽しむような社会情勢ではなく生産農家が年々減少、チューリップ栽培は衰退していきま



写真 1-2 かみゆうべつチューリップ公園
と園内周遊電動バス

出典：湧別町

た。その後、かつて町を活気づけたチューリップを後世に残そうと、昭和 51(1976)年、町の花(旧上湧別町)に指定されました。現在の「かみゆうべつチューリップ公園」は、有志により小規模から始まったチューリップ畑が拡大し、昭和 63(1988)年には町立公園として指定されました。

見頃を迎える 5 月に開催されるチューリップフェアには、町内外から多くの人々が訪れます。

(5) 人と自然が輝くオホーツクのまち

町章は湧別町の「ゆ」をモチーフとし、中央に輝く五光星は北海道開拓精神のシンボル、そして「人と自然が輝くオホーツクのまち」の将来像を表現しています。使用色の青は雄大なオホーツク海を、緑で表現した星は豊かに実る農地の作物を表しています。



図 1-2 町章

出典：湧別町

全国から集まった屯田兵が開拓した本町には、先人からのフロンティアスピリットが脈々と引き継がれています。バイオマスの利活用により「第二の開拓」を目指します。

1.3.2 人口

本町の人口は8,543人、世帯数4,019世帯(令和2年4月)であり、1世帯当たりの人口は2.13人です。

昭和60(1985)年から令和2(2020)年の35年間に人口が13,702人から8,543人まで約38%減少しました。

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、令和22(2040)年には人口が6,150人と、令和2年の約7割まで減少すると見込まれています。

表 1-1 人口・世帯数の推移

	昭和60年 (1985年)	平成2年 (1990年)	平成7年 (1995年)	平成12年 (2000年)	平成17年 (2005年)	平成22年 (2010年)	平成27年 (2015年)	令和2年 (2020年)
人口 (人)	13,702	12,692	12,042	11,423	10,758	10,041	9,231	8,543
世帯数 (世帯)	4,201	4,039	4,107	4,079	4,125	4,010	3,861	4,019

出典：国勢調査(各年10月)、令和2年は住民基本台帳(令和2年4月)

昭和60年～平成17年は、合併前の旧上湧別町と旧湧別町の合計

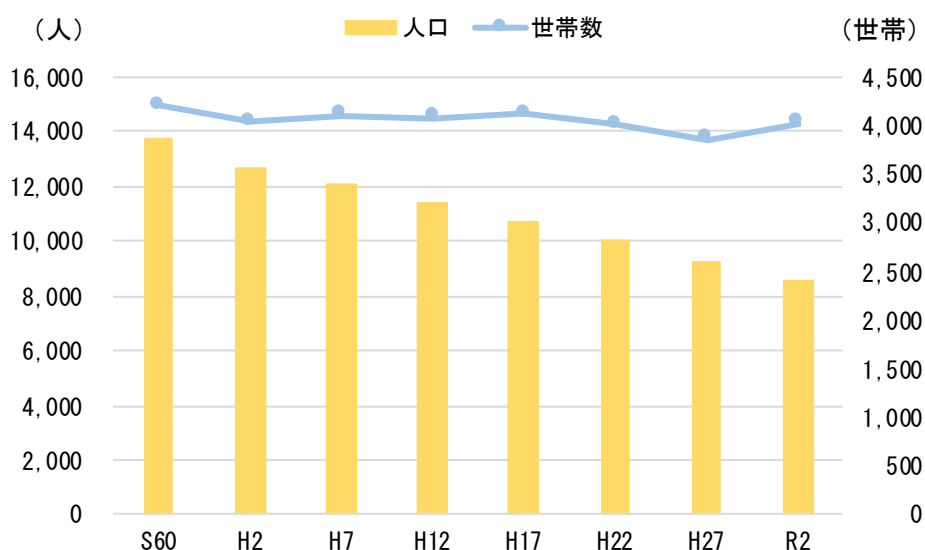


図 1-3 人口・世帯数の推移

出典：国勢調査、昭和60年～平成17年は、合併前の旧上湧別町と旧湧別町の合計

人口減少を抑制するために、地域に賦存するバイオマスを活用した地域経済の活性化と雇用の創出が不可欠です。

1.4 地理的特色

1.4.1 位置

本町は、北緯 44 度 9 分・東経 143 度 34 分、北海道の東北部、オホーツク海沿岸の中央部に位置し、北海道で最大の湖・サロマ湖を抱え北見峠に水源を持つ湧別川流域に肥沃な大地が広がる地勢を有しています。

北はオホーツク海に面し、東は北見市、佐呂間町に、南は遠軽町に、西は紋別市に隣接しています。



図 1-4 湧別町の位置図

出典：北海道オホーツク総合振興局ホームページ

湧別町は、オホーツク海とサロマ湖に面した、畑作・酪農と水産業の町です。

1.4.2 地形

町のほぼ中央に湧別川が流れ、その流域とオホーツク海沿岸に平地が広がっています。湧別川流域の左右は、ゆるやかな丘や 500m 以下の標高の低い山で形成されています。

東部は北海道最大の湖「サロマ湖」に接しており、冬期の「流氷」と「湧別川」の恵みにより、海の幸と山の幸が豊富な地域です。



図 1-5 湧別町の航空写真

出典：Google マップ

湧別川流域とオホーツク海沿岸に平地が広がり、ホタテや牡蠣、さけ等の海の幸と、たまねぎやかぼちゃ等の山の幸が豊富な地域です

1.4.3 交通体系

(1) 道路

本町は、オホーツク海沿岸を走る国道 238 号、湧別川に並行して町の中央を走る国道 242 号の 2 国道を主軸とし、その他の道道、町道が近隣市町村と連絡する道路網を形成しています。

高規格幹線道路は、旭川紋別自動車道の延伸が遠軽 IC まで進んでいます。本町役場への自動車でのアクセスは、旭川市から旭川紋別自動車道経由により約 140km・2 時間、また札幌市から道央自動車道、旭川紋別自動車道経由により約 280km・3 時間 45 分です。

(2) 鉄道、空路

本町は鉄道の空白地帯にあり、最寄りの JR 駅は遠軽駅です。湧別町からは自動車 20

分、遠軽駅から札幌駅までの所要時間は3時間30分です。

本町最寄りの空港は紋別空港(紋別市)であり、飛行機によるアクセスは羽田空港～紋別空港間が2時間、紋別空港～湧別町まで自動車で40分を要します。



図 1-6 本町へのアクセス

1.4.4 気候

本町の気候はオホーツク海型気象地帯としての特色があり、降水量は年間 720mm 前後、平均気温は 5.8℃前後です。本町は、西が北見山地と石狩山地、南から東が阿寒山地・知床連山、北東にはオホーツク海と、周りを山と海に囲まれた地形であることから、雨雲が遮られるため降水量が少なく、日照時間が多いことが特徴です。

春から夏にかけては、山越え気流によるフェーン現象により、最高気温は 30℃以上になることも珍しくなく、冬の最低気温はマイナス 20℃以下となることもあります。

表 1-2 湧別町の月別気温、降水量及び日照時間

月	平均気温 (℃)	日最高気温 (℃)	日最低気温 (℃)	降水量 (mm)	日照時間 (時間)
1月	-7.1	-2.7	-12.4	40.0	112.6
2月	-7.4	-2.8	-13.2	26.7	137.0
3月	-2.7	1.4	-7.6	33.8	178.2
4月	4.2	9.2	-0.5	43.3	178.2
5月	9.5	14.8	4.4	50.6	197.4
6月	13.0	17.7	8.9	59.3	179.5
7月	17.1	21.5	13.4	93.6	166.8
8月	19.4	24.0	15.5	99.0	169.3
9月	15.6	20.8	11.1	111.0	169.3
10月	9.5	15.1	4.5	64.5	153.6
11月	2.7	7.2	-1.6	46.9	113.6
12月	-3.7	0.3	-8.4	43.3	107.3
年	5.8	10.5	1.2	715.5	1,866.8

出典：気象庁(アメダス) 湧別観測所、1981～2010 年の平年値

気候はオホーツク海型気象地帯としての特色をもち、冬の寒さは厳しく、例年 1 月下旬頃から流氷が接岸しますが、比較のおだやかな気候で日照時間に恵まれています。

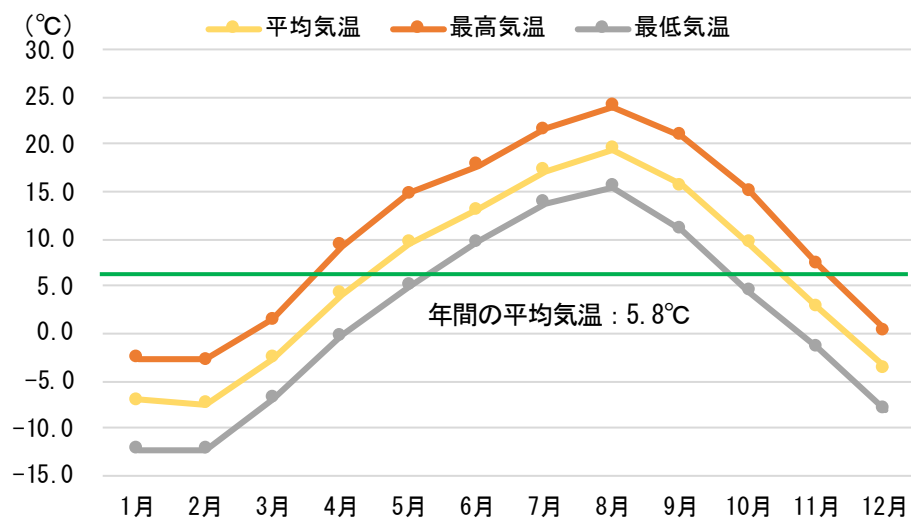


図 1-7 湧別町の平均気温

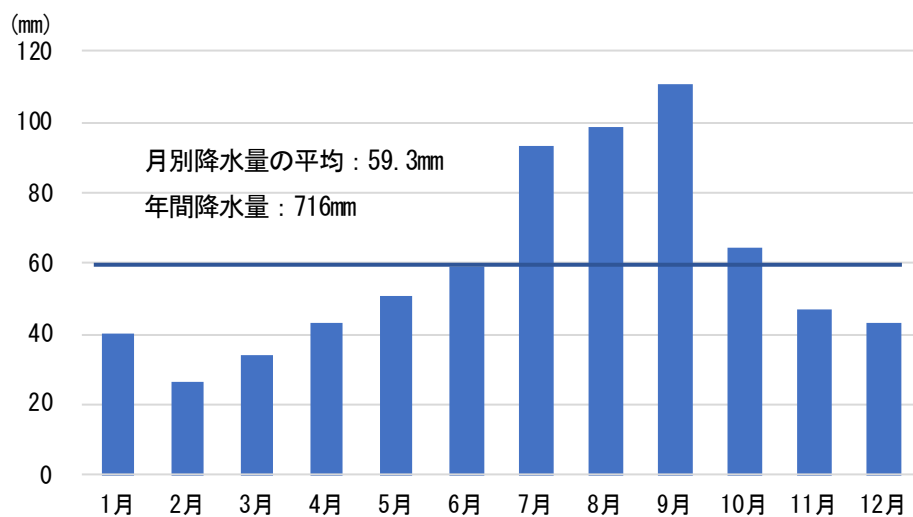


図 1-8 湧別町の降水量

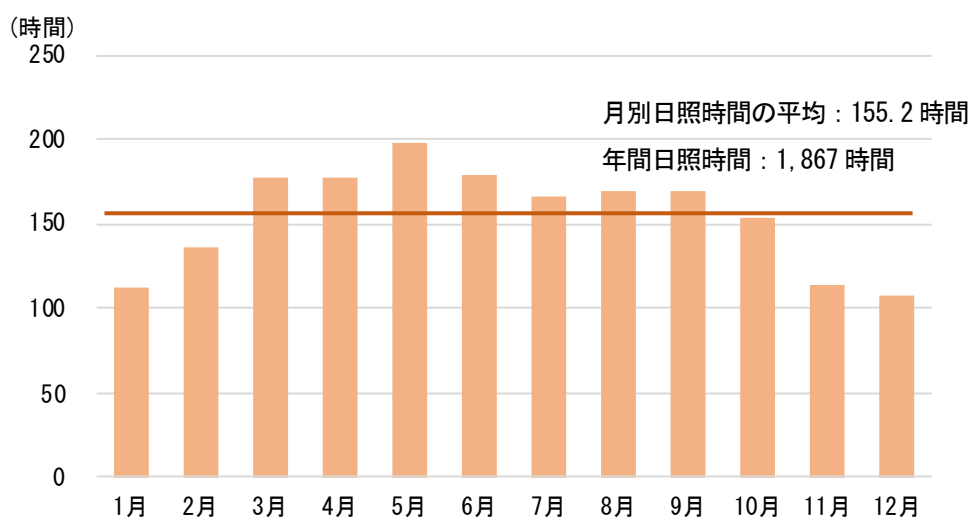


図 1-9 湧別町の日照時間

出典 : 気象庁(アメダス) 湧別観測所、1981～2010 年の平年値

1.4.5 面積

本町の総面積は505.79km²(平成31(2019)年)です。地目別面積による土地利用状況(その他を除く)は、割合の大きい順から山林187.02km²(37.0%)、畑105.76km²(20.9%)となっています。

表 1-3 地目別面積(平成31年)

	面積 (km ²)	割合 (%)
畑	105.76	20.9%
宅地	8.77	1.7%
山林	187.02	37.0%
牧場	0.30	0.1%
原野	8.15	1.6%
雑種地	6.21	1.2%
その他*	189.58	37.5%
総面積	505.79	100.0%

*その他には保安林が含まれている

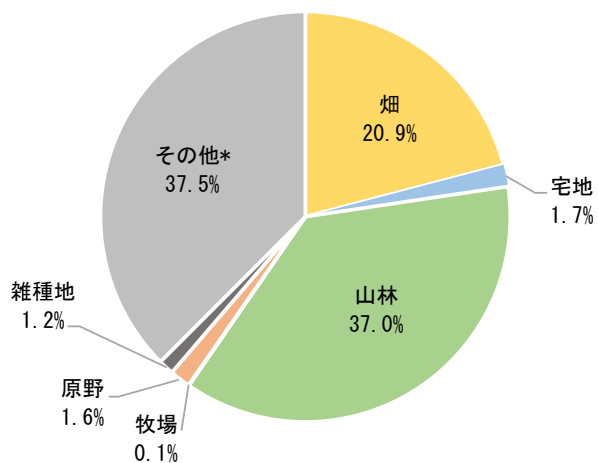


図 1-10 地目別面積(平成31年)

出典：平成31年固定資産概要調書

(平成31年1月1日現在)

1.5 経済的特色

1.5.1 産業別人口

(1) 産業別就業人口

平成 27(2015)年国勢調査における本町の産業別就業人口は、第 1 次産業が 1,596 人(33%)、第 2 次産業が 997 人(21%)、第 3 次産業が 2,169 人(45%)となっており、就業人口は、いずれの産業も減少傾向に推移しています。

第 1 次産業の内訳は、農業が 974 人(20.4%)、林業が 25 人(0.5%)、漁業が 597 人(12.5%)と、農漁業が第 1 次産業の大半を占めています。

(2) 産業別就業人口の割合

産業別就業人口の割合を見ると、昭和 60(1985)年と比較して、第 1 次産業と第 2 次産業の割合が減少しているのに対し、第 3 次産業の割合は増加傾向に推移しています。

- ・ 本町は、1 次産業が就業人口の 33%(1,596 人)を占める農業と漁業のまちです。
- ・ 町内には家畜ふん尿や水産資源等多くの未利用資源が賦存しています。

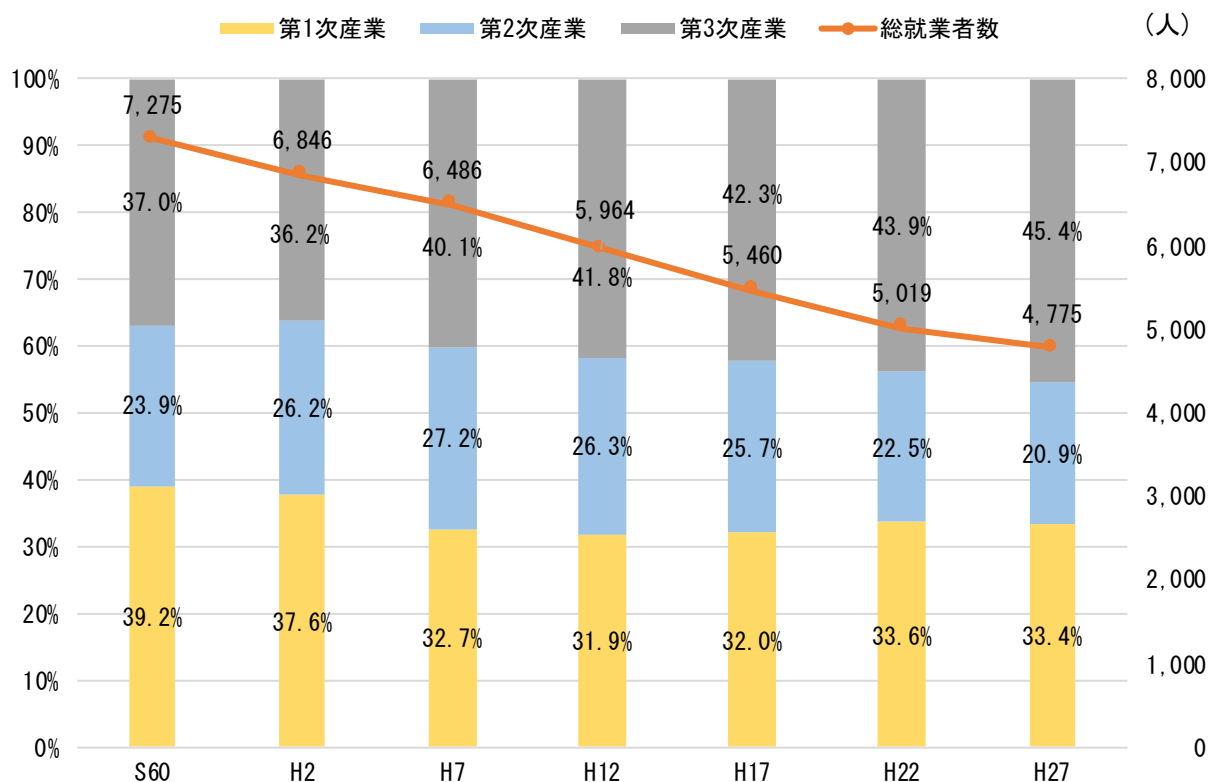


図 1-11 産業別就業人口の推移

出典：国勢調査、昭和 60 年～平成 17 年は、合併前の旧上湧別町と旧湧別町の合計

表 1-4 産業別就業人口の推移

		昭和60年 (1985年)	平成2年 (1990年)	平成7年 (1995年)	平成12年 (2000年)	平成17年 (2005年)	平成22年 (2010年)	平成27年 (2015年)
第1次産業	農業	2,033 27.9%	1,791 26.2%	1,409 21.7%	1,229 20.6%	1,090 20.0%	1,015 20.2%	974 20.4%
	林業	135 1.9%	92 1.3%	71 1.1%	39 0.7%	32 0.6%	29 0.6%	25 0.5%
	漁業	681 9.4%	693 10.1%	640 9.9%	636 10.7%	623 11.4%	642 12.8%	597 12.5%
	計	2,849 39.2%	2,576 37.6%	2,120 32.7%	1,904 31.9%	1,745 32.0%	1,686 33.6%	1,596 33.4%
第2次産業	鉱業	14 0.2%	18 0.3%	14 0.2%	14 0.2%	4 0.1%	8 0.2%	9 0.2%
	建設業	800 11.0%	722 10.5%	783 12.1%	697 11.7%	536 9.8%	416 8.3%	354 7.4%
	製造業	922 12.7%	1,052 15.4%	967 14.9%	855 14.3%	861 15.8%	704 14.0%	634 13.3%
	計	1,736 23.9%	1,792 26.2%	1,764 27.2%	1,566 26.3%	1,401 25.7%	1,128 22.5%	997 20.9%
第3次産業		2,690 37.0%	2,476 36.2%	2,601 40.1%	2,491 41.8%	2,310 42.3%	2,203 43.9%	2,169 45.4%
計		7,275 100.0%	6,844 100.0%	6,485 100.0%	5,961 99.9%	5,456 99.9%	5,017 100.0%	4,762 99.7%
分類不能		— —	2 0.0%	1 0.0%	3 0.1%	4 0.1%	2 0.0%	13 0.3%
合計		7,275	6,846	6,486	5,964	5,460	5,019	4,775

出典：国勢調査、昭和60年～平成17年は、合併前の旧上湧別町と旧湧別町の合計

1.5.2 事業所数

本町には 437 の事業所があり、産業大分類別従業者数の内訳をみると製造業が最も多く 835 人(24%)、次いで卸売業・小売業が 548 人(16%)となっています(平成 28(2016)年)。

産業 3 部門別就業者数では、第 1 次産業が 346 人(10%)、第 2 次産業が 1,327 人(38%)、第 3 次産業が 1,836 人(52%)となっています。なお、製造業の製造品出荷額の約 7 割を食料品製造業が占めています(23 ページ、1.5.7 工業(製造業)参照)。

酪農、畑作及び水産業が盛んで、製造業の製造品出荷額の約 7 割が食料品製造業であることから、家畜ふん尿の他に、廃棄物系バイオマス(食品工場残渣)が原料として期待されます。

表 1-5 業種別事業所数及び従業者数(平成 28 年)

		事業所数 (事業所)	従業者数	
			(人)	割合 (%)
第1次産業	農業	30	199	6%
	林業	3	53	2%
	漁業	5	94	3%
	計	38	346	10%
第2次産業	鉱業、採石業、砂利採取業	0	0	0%
	建設業	39	492	14%
	製造業	60	835	24%
	計	99	1,327	38%
第3次産業	電気、ガス、熱供給、水道業	2	10	0%
	情報通信業	2	4	0%
	運輸業、郵便業	9	198	6%
	卸売業、小売業	97	548	16%
	金融業、保険業	6	46	1%
	不動産業、物品賃貸業	13	27	1%
	学術研究、専門・技術サービス業	7	32	1%
	宿泊業、飲食サービス業	41	145	4%
	生活関連サービス業、娯楽業	37	110	3%
	教育、学習支援事業	7	18	1%
	医療、福祉	29	381	11%
	複合サービス事業	13	210	6%
	サービス業(他に分類されないもの)	37	107	3%
	計	300	1,836	52%
合計		437	3,509	100%

出典：平成 28 年経済センサス-活動調査

1.5.3 農業

(1) 農業就業人口と農家数

農業就業人口は、昭和 60(1985)年の 2,294 人から、平成 27(2015)年には 743 人となり、30 年間に 1,551 人(67%)の減少となっています。

農家数は、昭和 60 年の 908 戸から、平成 27 年には 296 戸となり、612 戸(67%)の減少となっています。

表 1-6 農業就業人口と農家数の推移

年度	農業就業人口(人)	総農家(戸)	専業農家(戸)	兼業農家(戸)		
				総数	第1種	第2種
昭和60(1985)年	2,294	908	443	465	280	185
平成 2(1990)年	2,009	797	420	377	231	146
平成 7(1995)年	1,647	639	319	320	202	118
平成12(2000)年	1,292	476	264	212	162	50
平成17(2005)年	1,152	382	264	118	94	24
平成22(2010)年	941	333	259	74	56	18
平成27(2015)年	743	296	236	60	50	10

出典：第 2 次湧別町農業振興計画（令和 2 年 4 月）

注）第 1 種兼業農家：農業所得の方が兼業所得よりも多い兼業農家

第 2 種兼業農家：兼業所得の方が農業所得よりも多い兼業農家

(2) 経営耕地面積別農家戸数の推移

経営耕地面積は、昭和 60 年(1985)年の 9,035ha から平成 27(2015)年には 9,837ha となり、30 年間で 802ha(8%)の増加となっています。また、経営耕地面積が 50ha 以上の大規模農家が年々増加しています。

表 1-7 経営耕地面積規模別農家戸数の推移

年度	耕地面積	農家戸数(戸)	1ha未満(戸)	1～5ha(戸)	5～10ha(戸)	10～20ha(戸)	20～50ha(戸)	50ha以上(戸)
昭和60(1985)年	9,035	908	165	138	202	284	119	
平成 2(1990)年	9,521	797	161	86	131	252	165	2
平成 7(1995)年	9,740	639	119	60	61	170	220	9
平成12(2000)年	9,760	476	46	35	41	123	213	18
平成17(2005)年	9,350	382	33	25	16	86	193	29
平成22(2010)年	10,039	333	20	18	14	77	159	45
平成27(2015)年	9,837	296	17	14	11	61	144	49

出典：第 2 次湧別町農業振興計画（令和 2 年 4 月）

農業就業人口、農家数ともに減少していますが、町全体では経営耕地面積が増加しており、営農の効率化が図られています。50ha 以上の大規模農家が年々増加しています。

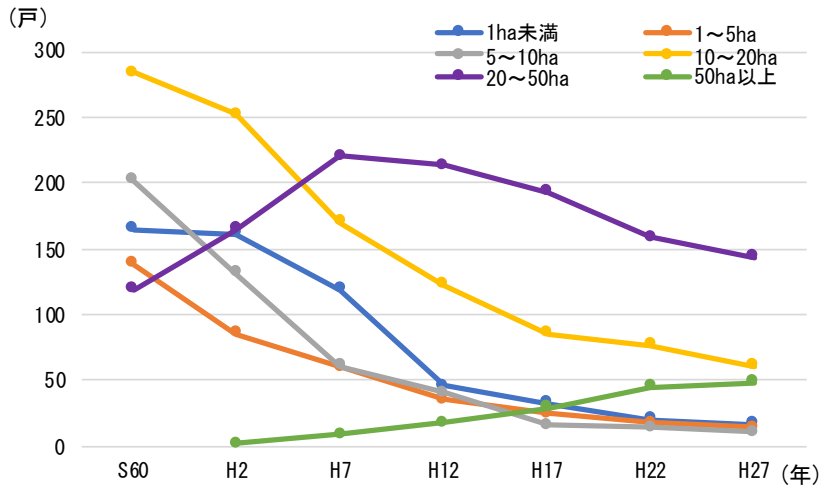


図 1-12 経営耕地面積規模別農家戸数の推移

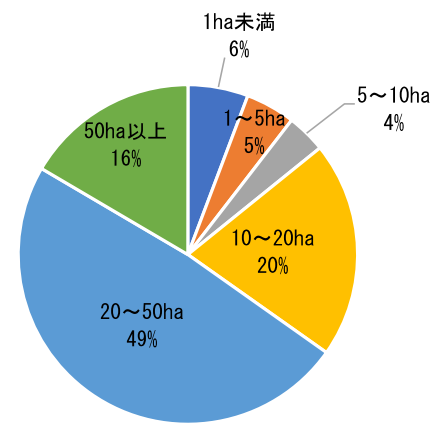


図 1-13 経営耕地面積規模別農家数の構成比(平成 27 年)

(3) 農作物の作付面積

平成 10(1998)年から 31(2019)年にかけて、畑作はてん菜、ばれいしょ、かぼちゃの作付面積が減少する一方、高収益作物であるたまねぎや新品種が開発された小麦が増加しています。

1 戸当たりの経営面積が、北海道としては大きくないことから、高収益野菜の栽培に取り組んできており、昭和 47(1972)年に 5.4ha であったたまねぎの作付面積は、平成 31 年には 549ha となり、本町における主力作物として確立されました。また、降水量の少ない本町において整備された畑地かんがい、たまねぎの生産性と品質向上に貢献しています。

酪農では牧草地が減少し、デントコーンの作付面積が増加しています。



写真 1-3 たまねぎ栽培

出典：湧別町

表 1-8 農作物別作付面積の推移 (単位: ha)

年度	平成10年	平成13年	平成16年	平成19年	平成22年	平成25年	平成28年	平成31年
小麦	652	515	503	497	521	595	643	686
てん菜	687	651	738	716	639	504	453	402
ばれいしょ	114	110	85	89	79	65	52	44
たまねぎ	430	476	486	536	541	549	549	549
かぼちゃ	197	176	155	166	157	156	104	87
スイートコーン	72	74	61	63	71	56	10	3
ブロッコリー	19	26	47	51	50	52	24	17
野菜	102	90	47	29	16	7	10	13
デントコーン	1,770	1,845	1,865	1,791	1,962	2,142	2,517	2,541
牧草	6,122	6,043	5,359	5,031	5,118	5,086	4,407	4,477
その他	5	2	-	-	-	-	-	-
合計	10,170	10,007	9,346	8,969	9,154	9,212	8,769	8,819

出典：第 2 次湧別町農業振興計画（令和 2 年 4 月）

畑作ではたまねぎと小麦が、酪農ではデントコーンの作付面積が増加しています。平成 31 年度の作付面積は、たまねぎが 549ha、小麦が 686ha、デントコーンが 2,541ha です。

(4) 家畜飼養頭数

乳用牛は、平成 10(1998)年の 18,745 頭から、平成 31(2019)年には 19,167 頭となっています。約 20 年間で農家戸数が大きく減少している中で、乳用牛頭数は若干増えており、コントラクター事業※1 や TMR センター事業※2 の導入・活用、法人化等により、経営の大規模化が進んでいます。

肉用牛は、平成 10 年の 11,969 頭から、平成 31 年には 5,760 頭に減少しています。従来はホルスタインや F1(黒毛和牛とホルスタインの交雑種)が多く飼養されていましたが、近年は高級牛肉である黒毛和牛の比率が高くなっています。

※1 農作業機械と労働力等を有して、農家等から農作業（酪農地域における飼料生産を含み、酪農ヘルパーは除く。）を請け負う組織（機関・団体等）

※2 サイレージ、とうもろこし等の飼料、ミネラル等を混ぜ合わせるにより、牛に必要な栄養素を全て含んだ完全飼料を構成員に供給するしくみ（TMR=Total Mixed Ration）

表 1-9 家畜飼養頭数の推移

年度		平成10年	平成13年	平成16年	平成19年	平成22年	平成25年	平成28年	平成31年
乳用牛	頭数(頭)	18,745	18,503	17,304	16,640	18,079	18,645	18,784	19,167
	戸数(戸)	261	245	202	180	167	159	153	131
	平均頭数(頭)	71.8	75.5	85.7	92.4	108.3	117.3	122.8	146.3
肉用牛	頭数(頭)	11,969	16,402	7,581	5,276	10,867	2,540	7,705	5,760
	戸数(戸)	76	75	43	34	59	29	32	21
	平均頭数(頭)	157.5	218.7	176.3	155.2	184.2	87.6	240.8	274.3

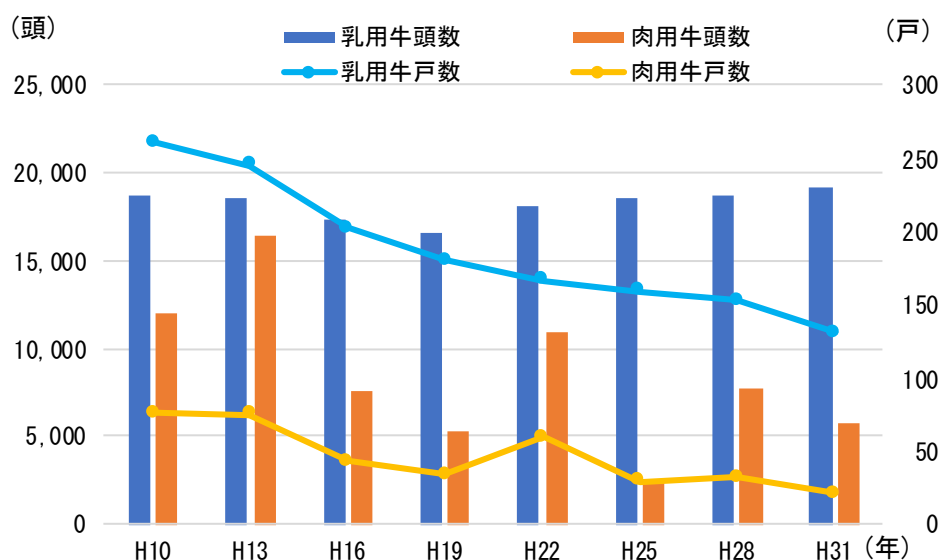


図 1-14 家畜飼養頭数の推移

出典：第 2 次湧別町農業振興計画（令和 2 年 4 月）

農家戸数が大きく減少する中で、乳用牛は平成 31 年には 19,167 頭に増頭されています。コントラクター事業や TMR センター事業の導入・活用、法人化等により、経営の大規模化が進んでいます。

(5) 出荷乳量等

搾乳牛頭数は、平成 10(1998)年の 10,991 頭に対し、平成 28(2016)年は 11,482 頭と 18 年で 4%の増頭ながら、出荷乳量は 81,514t から 106,010t と 30%の増産となっています。1 頭当たりの乳量も年々増加しており、牛体管理技術等向上の成果が見られます。

表 1-10 出荷乳量等の推移

年度	単位	平成10年	平成13年	平成16年	平成19年	平成22年	平成25年	平成28年
出荷乳量	t	81,514	77,904	81,291	82,407	91,269	100,400	106,010
搾乳牛頭数	頭	10,991	10,471	10,510	10,040	10,751	11,232	11,482
1戸当たり出荷乳量	t	334	318	409	460	547	652	693
搾乳牛1頭当たり乳量	kg	7,416	7,440	7,735	8,208	8,489	8,939	9,232

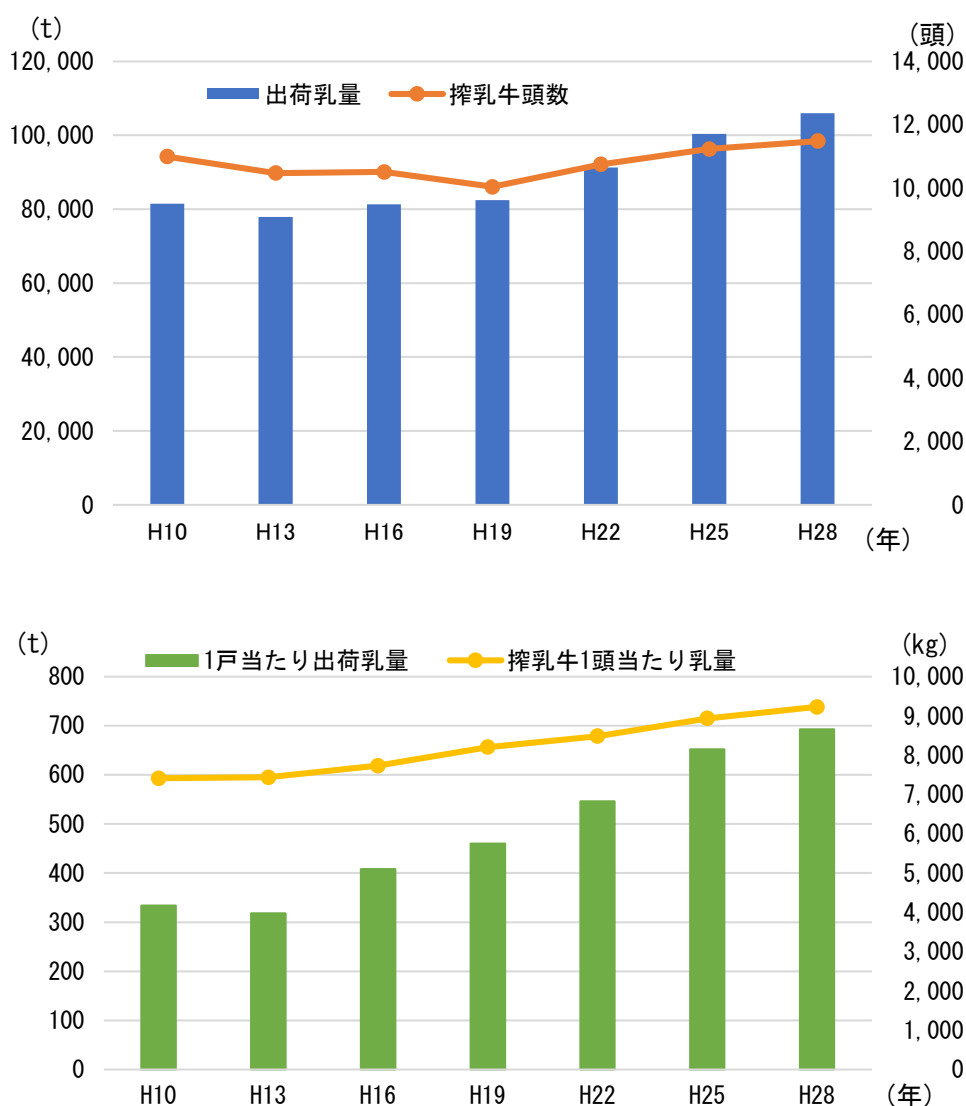


図 1-15 (上)出荷乳量、搾乳牛頭数の推移、(下)1 戸当たり出荷乳量、搾乳牛 1 頭当たり乳量

牛体管理技術等の向上から、1 頭当たりの出荷乳量が 9,232kg(平成 28 年)と飛躍的に増大しています。1 頭当たりのふん尿排泄量も比例して増加することから、ふん尿処理の効率化が急務です。

(6) 農業産出額

平成 30(2018)年の本町の農業産出額は 171 億 1,700 万円です。部門ごとの産出額では、耕種部門が 31 億 8,800 万円、畜産部門が 139 億 2,900 万円と畜産部門が全体の 8 割以上となっており、畜産部門の比率が年々増加しています。

年度毎の変動はありますが、農業産出額は増加していることから、農家数が減少する中、1 戸当たりの農業産出額が増加しています。

表 1-11 農業産出額の推移

(単位：百万円)

年度	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年
農産物	3,618	3,673	3,043	3,103	3,647	3,940	3,554
畜産物	8,946	8,341	8,240	9,058	9,486	8,960	9,880
合計	12,565	12,014	11,283	12,160	13,133	12,901	13,434
年度	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
農産物	3,986	3,750	4,250	3,604	3,359	3,061	3,188
畜産物	9,399	10,045	10,911	11,768	13,185	13,514	13,929
合計	13,385	13,795	15,162	15,372	16,544	16,575	17,117

(百万円)

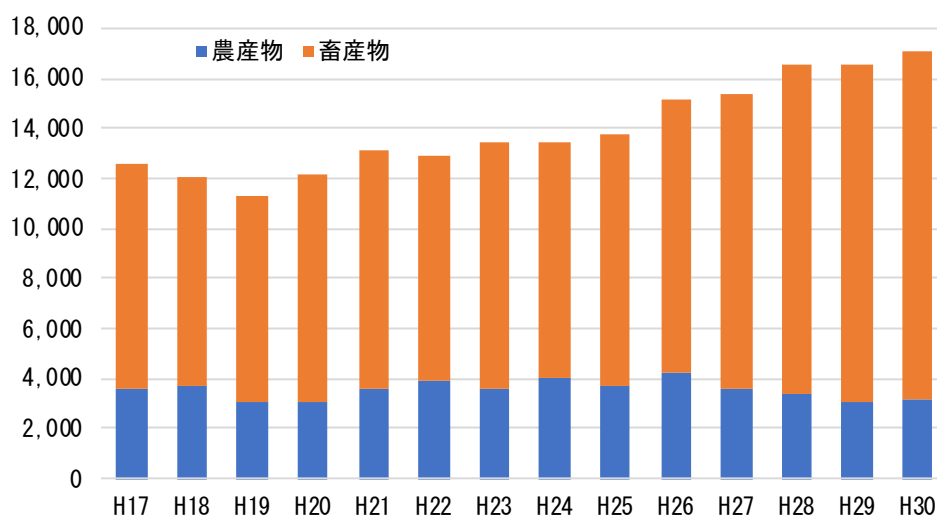


図 1-16 農業産出額の推移

出典：第 2 次湧別町農業振興計画（令和 2 年 4 月）

- ・ 農家数が減少する中、1 戸当たりの農業産出額が増加しています。
- ・ 農業産出額は 171 億円、うち畜産部門が 139 億円と全体の 8 割を占めています。
- ・ 畜産産出額が年々増加していることから、バイオマス発生量は増加傾向にあると推察できます。